

# 日本動物考古学会

## 第3回大会 プログラム・抄録集



2015年

7/4 (土)・5 (日)

奈良文化財研究所平城宮跡資料館

# 日本動物考古学会第3回大会

2015年 7月 4日(土)・5日(日)  
奈良文化財研究所 平城宮跡資料館講堂

プログラム・抄録集

日本動物考古学会(編)

The 3rd Annual Meeting of the Japanese Society for Zooarchaeology

Dates : July 4 and 5, 2015

Venue : Nara National Research Institute for Cultural Properties

Program & Abstracts

Edited by the Japanese Society for Zooarchaeology

実行委員長 : 山崎 健 (奈良文化財研究所)

Chairman of the Executive Committee :

Takeshi Yamazaki (Nara National Research Institute for Cultural Properties)

## 目次

ごあいさつ（会長挨拶文） .....	1
日本動物考古学会第3回大会開催のご挨拶 .....	2
大会組織委員会名簿 .....	3
スケジュール .....	4
大会参加費・懇親会費 .....	5
会場と交通アクセス .....	5
発表者の方へ .....	6
抄録集 □演 A .....	8
□演 B .....	9
□演 C .....	11
□演 D .....	13
□演 E .....	15
ポスター発表 .....	17
『動物考古学』33号 原稿募集に関するお知らせ .....	22

---

## ごあいさつ

---

日本動物考古学会第3回大会を奈良文化財研究所で開催することとなりました。まず、開催を受け入れていただいた奈良文化財研究所と、お世話いただいた埋蔵文化財センターの山崎健氏に厚くお礼を申し上げます。

さて、この学会の大会も第3回を迎えることとなりました。動物考古学は、人間が動物や植物とどのように付き合ってきたかを考える考古学の一分野です。その意味で、研究で扱うテーマは旧石器時代から現代までと長く、地理的にも日本列島だけではなく世界中に及びます。その内容も遺跡出土の動物遺体や植物遺体を記載するだけでなく、様々な研究方法や分析手法により多様なデータが得られて様々な解釈を行うことができます。このような動物考古学の特徴を生かすことにより、過去の人間生活の新しい側面を理解することができます。今回の大会においても多くの研究発表が予定されています。新しい研究成果が発表され、活発な議論が行われることを期待しています。

最後に、奈良文化財研究所で動物考古学の研究を行われてきた松井章氏が去る6月9日に急逝されました。松井さんは、研究所での業務の傍ら、学生の指導も行われ若い研究者の育成に努力されてきました。動物考古学研究会や日本動物考古学会の創立にも尽力されました。動物考古学を共に学んできた友人であり、ご逝去を悼むばかりです。ご冥福をお祈りいたします。

日本動物考古学会 会長  
西本豊弘

---

## 日本動物考古学会第3回大会開催のご挨拶

---

日本動物考古学会第3回大会を、2015年7月4日（土）と5日（日）の2日間にわたり、奈良文化財研究所の平城宮跡資料館講堂で開催いたします。

昨年度の総会で採択されましたように、これまで動物考古学研究会の研究集会や日本動物考古学会の大会は秋季に行われてきましたが、今年度から原則として春季に開催されることになりました。日本動物考古学会の大会は、動物考古学に携わる全国の研究者が集まる貴重な場でありま。今回も、口頭発表18件とポスター発表10件の計28件におよぶ多彩な研究発表が行われます。後期更新世から近現代までの動物に関わる幅広い内容が含まれ、日本国内だけではなく中国やモンゴルなどの海外での研究成果も発表される予定です。

活発な議論や交流・情報交換のできる有意義な大会となりますように準備を進めて参りました。また、懇親会も大会と同じ会場で行いますので、ぜひご参加ください。

最後になりましたが、今年で東日本大震災の発生から5年目を迎えます。奈良文化財研究所では、日本人類学会や日本植生史学会および日本動物考古学会に、復興調査支援の協力要請をさせていただいております。復興調査が「発掘調査」から「整理作業・報告書作成」へ移行しつつある中で、被災された地方自治体への負担がますます大きくなっており、継続性のある全国的な支援が求められています。今後とも引き続きご協力いただきますようお願いいたします。

日本動物考古学会第3回大会 実行委員長  
山崎 健

### 追記

大会プログラム・抄録集の印刷直前に、奈良文化財研究所の名誉研究員である松井章さんが亡くなりました。昨日お通夜で、本日もご葬儀が行われたところです。

ここで大会開催の経緯を話すことをお許し下さい。開催時期がこれまでの秋季から春季に変更となり、準備期間が短い中で次回大会を開催する必要が生じました。とくに会場の確保が困難で、奈文研にも春期開催の打診をいただきました。正直に言えば、復興支援を抱えながら、春期は文化財担当者研修課程（災害痕跡調査課程：2015年6月15日～19日）も実施するため、環境考古学研究室に余裕がない状況でした。しかし、上記のように日本動物考古学会に支援協力をお願いをしていることもあり、松井さんに相談したところ、「他が開催できないのであれば、奈文研で引き受けるべきだろう」と背中を押していただきました。

その頃（といってもまだ1年も遡らない頃の話なのですが）、松井さんは毎月のように海外調査へ精力的に出られていました。そのため、開催予定日にはくれぐれも海外出張を入れないでほしい、そしてぜひ発表してほしいとお願いをしました。

今大会で、奈良文化財研究所の環境考古学研究室および松井さんの科研に関わる発表は、合計9本。松井さんの名前の有無に関わらず、すべて松井さんの共同研究や松井さんの仕事を引き継いだ成果です。

そのご学恩に深く感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

（2015年6月11日）

---

日本動物考古学会第3回研究大会 大会組織委員会名簿

---

会長	西本 豊弘	(伊達市噴火湾文化研究所)
大会実行委員会 実行委員長	山崎 健	(奈良文化財研究所)
大会事務局		
事務局長	吉永 亜紀子	(慶應義塾大学)
事務局員	植月 学	(山梨県立博物館)
事務局員	佐藤 孝雄	(慶應義塾大学)
事務局員	樋泉 岳二	(早稲田大学)
事務局員	新美 倫子	(名古屋大学)
事務局員	本郷 一美	(総合研究大学院大学)
事務局員	山根 洋子	(港区立港郷土資料館)

---

## スケジュール

---

### ■ 4日(土)

12:15~	開場・受付
13:00~13:10	開会の辞
13:10~14:10	研究発表A
14:10~15:10	ポスターセッション
15:10~16:30	研究発表B
16:30~16:40	休憩
16:40~17:40	総会
17:40~17:50	記念撮影
18:15~20:15	懇親会

### ■ 5日(日)

9:00~10:00	研究発表C
10:00~10:10	休憩
10:10~11:30	研究発表D
11:30~11:40	休憩
11:40~13:00	研究発表E
13:00	閉会の辞

## 大会参加費・懇親会費

大会参加費	2,000 円(含む抄録集および茶菓代)
懇親会費	3,000 円

## 会場と交通アクセス

### 大会・総会・懇親会会場

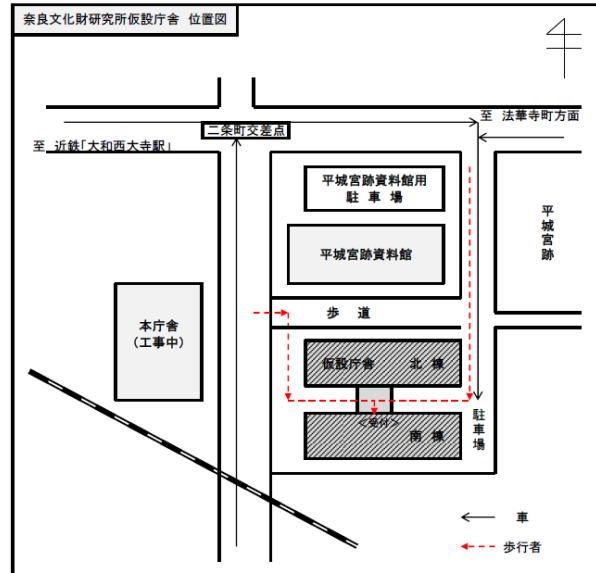
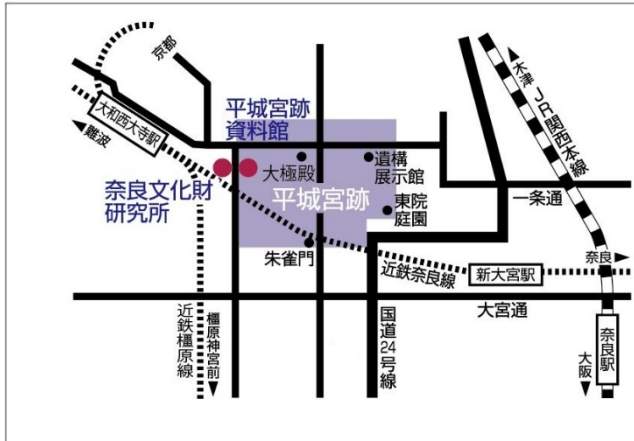
奈良文化財研究所 平城宮跡資料館講堂

〒630-8577 奈良市佐紀町 247-1, TEL: 0742-30-6733 FAX: 0742-30-6730

URL: <http://www.nabunken.go.jp/japanese/access.html>

### 会場へのアクセス

近鉄奈良線大和西大寺駅北口より東に向かい、二条町交差点を南へ徒歩約 10 分





---

## 発表者の方へ

---

### 1. 口頭発表

#### ■発表の準備

会場には、次発表者席をご用意いたします。発表開始 10 分前までにご着席ください。

#### ■発表時間

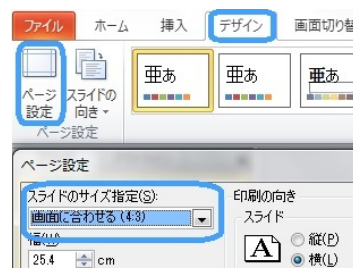
一件当たり 20 分を割当てさせていただいておりますが、内訳は発表時間 15 分、質疑応答 5 分とお考えください。13 分経過（ベル 1 回）、15 分経過（ベル 2 回）、20 分経過（ベル 3 回）をお知らせします。大会を円滑に運営できるよう、時間の厳守にご協力ください。

#### ■データの保存と PC の接続

会場備え付けの PC(OS:Windows7.0)を使用されます方は、事務局員の指示に従い、事前に PPT ファイルを同デスクトップ上に保存していただきますようお願いいたします。ご自身で持参されました PC を使用されます場合は、各自接続してください。

#### ■PowerPoint の画面設定

会場モニターへの画像投影比は「4:3」に設定されております。Microsoft PowerPoint をスクリーンに投影される予定の方は、【デザイン】→【ページ設定】→【スライドのサイズ指定】をご覧の上、【画面に合わせる(4:3)】が選ばれていることをご確認下さい（右記画像の青線部）。



この設定になっていない場合（【画面に合わせる(16:9)】など）は、画像の横幅が縮んで表示されたり文字列の配置が崩れたりすることもありますので、ご承知置きください。なお、上記メニュー名はいずれも Office2010・2007 の場合です。

### 2. ポスター発表

ご自身の演題番号が記されておりますボードにポスターを掲示してください。ポスターの掲示と取り外しはご自身でお願いいたします。なお、大会終了後も掲示されたままのポスターにつきましては、処分させていただくことになりますので、ご注意ください。

### 3. 配布資料

配布資料を用意されました方は、会場入口脇のテーブルに置いていただいても結構です。なお、コピーのご要望には一切応じかねますので、ご了承ください。

### 4. 発表抄録

かねてお知らせしてあります通り、ご提出いただきました抄録は当学会ウェブサイトや学会誌にも掲載させていただきます。同抄録と異なる原稿(600字以内)の掲載を希望されます方は、2015年10月9日(金)までに e-mail にて『動物考古学』編集委員会へご提出下さい。なお、新たに原稿を提出されます場合も、字数は600字以内に納めてくださいますようお願い申し上げます。

『動物考古学』編集委員会  
E-mail: [js.zoarch.ed@gmail.com](mailto:js.zoarch.ed@gmail.com)

A1 続縄文・オホーツク文化期におけるイヌの飼育・利用—礼文島浜中 2 遺跡 Nakatani 地点出土資料の検討—

○大西 凜（慶大）・澤田純明（新潟医療福祉大）・佐藤孝雄（慶大）

Dog keeping and using of the Epi-Jomon and Okhotsk culture: analyses of the dog remains unearthed from the Hamanaka 2 site, Rebun Island

Rin ONISHI, Junmei SAWADA, Takao SATO

続縄文・オホーツク文化期の遺跡から出土する犬骨に関しては、直良信夫(1957、1973)以来、幾人もの研究者が注目し、一部の資料につき計測や形態分類なども試みてきた(西本 1981、内山 2000)。しかしながら、近隣他集団と比較し、その形質を定量的に論じた研究は少なく(内山・松村 1997)、出土部位頻度や解体痕等も詳細に観察した上で、当該期におけるイヌの飼育環境や利用法を総合的に論じた研究も未だ満足に行われていない。2011・2013・2014 年度に筆者らが調査した浜中 2 遺跡では、続縄文・オホーツク文化期の犬骨が出土した。そこで、発表者らはそれらの多角的かつ総合的な分析を試みた。その結果、明らかにし得た事柄は以下に纏められる。(1)続縄文・オホーツク文化期のイヌは、ともに現生シバイヌよりもやや大きい体高 42-43cm ほどの中型犬であり、相互に形質的特徴が酷似する。(2)外傷痕や関節炎などをもつ資料が認められないことから、両文化期にあって、イヌ狩猟やけん引等に使役されることはなかったと推測し得る。死亡年齢構成が幼犬・亜成犬に偏る点。散乱状態で出土する点。解体痕をもつ資料が認められる点。それらも勘案するなら、両文化期を通じ、イヌは主に食用目的のため飼育されていたと考えてよい。

A2 オホーツク文化のブタ飼育にみる時期差—サイズとエナメル質減形成に関する検討—

○服部太一（慶大）・澤田純明（新潟医療福祉大）・佐藤孝雄（慶大）

Changes in pig rearing strategies during the Okhotsk culture: a study on the morphology and enamel hypoplasia

Taichi HATTORI, Junmei SAWADA, Takao SATO

オホーツク文化においてブタが飼育されていたことはつとに知られている。また、遺体の出土量の違いから同家畜種への依存度に地域的・時期的相違が存在したことも疑う余地がない。一般に“カラフトブタ”と呼ばれるこれらのブタの形質的特徴については、直良信夫(1937)を端緒として、金子浩昌(1973)、西本豊弘(1981)らによって論じられてきた。また aDNA による系統地理解析も石黒直隆ら(2001)によって試みられている。しかしながら、同文化の生業活動に関わる飼育・利用法や、それらの時期的変化については今日までほとんど論じられていない。幸いにも演者らは 2011 年以降、礼文島浜中 2 遺跡 Nakatani 地点の発掘調査に携わるなか、保存状態の極めて良いカラフトブタ遺体群を分析する機会に恵まれた。そこで本発表では、同じくオホーツク文化期に属する礼文島香深井1遺跡出土資料群も対象に加え、出土部位、死亡時期構成を精査したうえで、形態の定量的検討とストレスマーカーであるエナメル質減形成の観察に基づく時期比較をおこなった。その結果、以下の2点を確認するに至った。(1)前期(十和田期: 5~6 世紀頃)のブタは骨・歯ともに中期(刻文期: 7 世紀頃)以降よりも大きく、出土量の差を考慮すると、前期と中期以降の飼育・利用形態が異なる可能性が高い。(2)エナメル質減形成は高頻度で観察され、その出現頻度は家畜が増加し、魚骨層の形成が低調となる後期(沈線文期: 8~9 世紀頃)に高くなる。

### A3 野鶏から家鶏への道—飼い慣らし技術の比較研究—

○池谷和信（国立民族学博物館・総合研究大学院大学）

The transition from wild chicken to domestic chicken: comparative studies of the taming techniques

Kazunobu IKEYA

1. 目的・方法 鶏を対象にした動物考古学は、野鶏から家鶏への家禽化の年代や場所、家鶏の拡散過程とその年代など、これまで多くの研究の蓄積がみられる。また、最近の英国では、動物考古学を中心にして分子生物学、遺伝学、民族学などの隣接分野の研究者を巻き込んだ大型の研究プロジェクトが進行している(Callaway2014)。この結果、家禽化の年代や場所のみならず、家禽化の過程に関する新しいモデルの提示が研究課題にもなっている。筆者は、現在でも赤色野鶏 (*Gallus gallus*) が生息している家禽化の場所ともいわれる東南アジアから南アジアにかけての内陸部において野鶏と人とのかかわりについての民族学的調査を進めてきた(池谷 2015)。具体的には、野鶏を対象にした狩猟活動、およびそのための「おとりの鶏」をつくるための野鶏の飼い馴らしの技術などである。本研究では、飼い馴らしの過程とそれに伴う技術を把握することから、先史時代における家禽化過程に関するモデルを考察することを目的とする。2. 結果と考察 1) 野鶏の飼い馴らし過程: どのような状況下で人が野鶏を捕獲できるのか、また、捕獲に成功した場合にどのくらいの期間にわたって飼養が継続するのかを明らかにした。2) 飼い馴らしの技術: 上述の生育段階に応じてどのような技術が新たに必要とされるのか、野鶏の個体差、人側の個性などの変数を考慮して論じた。3) 飼い馴らしと「家禽化」: 飼い慣らしは家禽化とは異なる方向であるという批判に対しての答えを述べた。以上のことから、本研究では家禽化の過程に関する新しいモデルを提示すると同時に、鶏の動物考古学的研究と民族学的研究のかかわり方について論議する。

---

7/4 (土) 15:10~16:30 研究発表B

座長：本郷一美（総研大）

---

### B1 中国浙江省田螺山遺跡における動物遺存体の共同研究

○菊地大樹（京都大学）・松井章（奈良文化財研究所）・中村俊夫（名古屋大学）・丸山真史（東海大学）・孫国平（浙江省文物考古研究所）

Collaborative Research of faunal remains from Tianluoshan site, Zhejiang Province, China

Hiroki KIKUCHI, Akira MATSUI, Toshio NAKAMURA, Masashi MARUYAMA, Guoping SUN

近年、分子生物学的研究の成果を取り入れた動物分類学や動物考古学の進展により、東アジアは、イヌ、ブタ、ニワトリの家畜・家禽化の起源地として注目を集めている。中国浙江省をはじめとする長江下流域は、水稲稲作の起源地である可能性が高く、日本への水稲稲作農耕の伝播を知るうえで重要な地域となっている。そして、そのような初期農耕に関連する新石器時代遺跡から出土した大量の動物骨を総合的に研究し、家畜・家禽の起源地とその伝播、発展の過程を明らかにしていくことは、極めて重要な課題である。このような観点から、われわれは、この地域のドメスティケーションの起源とその発達について、2013年より、浙江省文物考古研究所と共同研究を開始した。対象遺跡となる田螺山遺跡は、浙江省余姚市に位置する、新石器時代の河姆渡文化に属する遺跡である。本発表では、田螺山遺跡の位置づけおよび、これまで実施してきた出土動物遺存体の整理・分析作業の状況について報告する。

## B2 田螺山遺跡出土の魚類遺存体について

○松井章（奈文研）・真貝理香（奈文研）・孫国平（浙江省文物考古研究所）

Fish remains recovered from Tianluoshan site

Akira MATSUI, Rika SHINKAI, Guoping SUN

中国浙江省の田螺山遺跡は、初期農耕遺跡として有名な河姆渡遺跡から北東へ約 7 キロに位置する低湿地遺跡である。田螺山遺跡が形成されたのは、河姆渡遺跡とほぼ同時期と考えられており、高床建物などの遺構が良好な状態で検出され、大量の土器や石器とともに動植物遺存体が出土している。当遺跡の魚類については、これまで K3 魚骨坑と呼ばれる遺構から出土したコイ科の分析が行なわれたが、今回、新たに T406 区-7 層の魚類遺存体（椎骨を除く）を同定する機会を得たため、その概要を報告する。魚類遺存体は淡水産のカムルチー、コイ科（コイ、フナ属）、ナマズ目（ナマズ科、ギギ科）といった魚類を中心に、河口～汽水域、もしくは内湾海域に生息するスズキ属、ボラ科などの出土を確認した。またコイの咽頭歯から、体長復元を行ったところ、30～40 センチ代にピークを持つ正規分布を示し、成魚を捕獲していたことが明らかになった。遺跡形成当時、周辺には、河川・湿地が広がっていたことが、珪藻・花粉などの分析から指摘されており、今回、同定した魚類相も、そのような環境を裏付けるものである。また当資料は、すべて水洗フルイ選別を行なった上で、採集されているにもかかわらず、当該環境に生息していたと推測される小型の淡水魚の骨が出土していないことも特徴的である。出土する魚種は極めて限定的であり、体長の大きな魚類を選択的に捕獲していたと考えられる。

## B3 中国新石器時代の初期稲作集落における鳥類利用—浙江省・田螺山遺跡の事例研究—

○江田真毅（北大）・孫国平（浙江省文物考古研究所）

Bird exploitation in the Neolithic early rice cultivation society: a preliminary study of bird remains from Tianluoshan Site, Zhejiang, China

Masaki EDA, Guoping SUN

田螺山遺跡は中国浙江省余姚市にある初期稲作文化の集落跡である。低湿地性の同遺跡からは動物骨を含む有機質遺物がきわめて良好な状態で検出されているものの、鳥類遺体はほとんど分析されてこなかった。本報告では、田螺山遺跡の約 6500～7000 年前に比定される遺物包含層および土坑から検出された鳥類遺体の分析から、中国新石器時代の初期稲作集落における鳥類利用について検討した。鳥類遺体にはキジ科、カモ科（ガン亜科、カモ亜科、マガモ属、スズガモ属を含む）、カイツブリ科、アビ科、コウノトリ科、ウ科、ペリカン科、サギ科、クイナ科、カモメ科、タカ科の 10 目 11 科が含まれていた。出土破片数はカモ科（約 53%）とクイナ科（約 38%）が多く、他の分類群は少なかった。確認された分類群のうちアビ科が主に海岸あるいは海洋に生息するのを除くと、他の分類群は主に陸水域や湿地に生息する種で構成されるものであった。遺跡の形成時の海岸までの距離は約 10km と推定されるものの、鳥類は主に陸水域や湿地で獲得されていたことが示唆された。遺体群中にはキジ科がわずかに含まれていたものの、これまでのところニワトリが利用されていたことを積極的に支持する資料は検出されていない。発表では、人々の鳥類への需要や鳥類が人々に供給された時期などについての議論を通じて、初期稲作集落における鳥類利用について考察する。

#### B4 中国浙江省田螺山遺跡における新石器時代の動物とヒトの炭素・窒素同位体分析

○米田 穰（東大総合研究博物館）・孫国平（浙江省文物考古研究所）

Carbon and nitrogen isotope analyses on the Neolithic faunal and human remains from the Tianluoshan site, Phejiang Province, China

Minoru YONEDA, Guoping SUN

中国浙江省余姚市の田螺山遺跡は河姆渡文化に属する低湿地遺跡で、人骨、動物骨、植物遺存体を含む膨大な遺物の調査が進行中だ。本研究では、初期稲作農耕民の主要な家畜、イノシシ・ブタを主な対象として、骨コラーゲン中の炭素・窒素同位体比を測定し、ヒトと動物の食生態を比較した。コラーゲンの同位体比は、食物中のタンパク質と比例するので、ヒトや動物の食性復元が半定量的に可能である。田螺山遺跡では、南川ら(2010)がヒト、イノシシ、シカについて炭素・窒素同位体比を報告している。そこでは、ヒトはイネや堅果類を含む C3 植物に依存し、海産物や C4 植物をほとんど利用せず、イノシシでは一部で飼育の形跡が認められるとされた。本研究では、この3種に加えイヌ、野生哺乳類、鳥類を分析し、生態系におけるイノシシの地位からヒトの影響を議論した。分析の結果、田螺山出土野生動物の炭素・窒素同位体比は極めて多様であり、窒素同位体比の上昇のみでヒトの影響とするのは危険と考えられる。また、家犬と考えられるイヌがヒトに極めて類似するのに対し、イノシシは比較的窒素同位体比が低く、個体差が大きい特徴が示された。これは、先行研究の指摘のようにヒトの影響の強弱に起因する可能性があるが、一方、野生イノシシが多様な生態系を利用したこと起因する可能性もある。今後、時代変化や遺跡間の比較を通じて、ヒトによるイノシシ食生態への影響を検討することが必要だ。

---

7/5(日) 9:00~10:00 研究発表C

座長: 樋泉岳二(早大)

---

#### C1 縄文海進期温暖化を示す魚類相について—岡山市彦崎貝塚出土のハマギギ科とニベ科魚類を中心に—

○大江文雄（奈文研）・松井章（奈文研）・田嶋正憲（岡山市教委）・真貝理香（奈文研）

Global warming during the Jomon transgression, and the faunal change in marine fish: ariid and sciaenid fishes from Hikozaki shell midden, Okayama City

Fumio OHE, Akira MATSUI, Masanori TAJIMA, Rika SHINKAI

岡山市彦崎貝塚は瀬戸内海に開く旧児島湾岸に立地する縄文時代前期から晩期に形成されたハイガイを主体とする貝塚で、多くの土器、人骨、魚骨、獣骨等が発掘されている(岡山市教育委員会, 2006,2007,2008)。魚類遺存体として特記されるものは北太平洋西部の亜熱帯から熱帯の沿岸域・マングローブに生息するナマズ目ハマギギ科(Ariidae)トウカイハマギギ *Plicofollis nella* (Valenciennes)と、スズキ目ニベ科(Sciaenidae)のコイチ *Nibea albiflora* (Richardson)並びにホンニベ *Miichthys miuy* (Basilewsky)の出土である。これら3種の魚類遺存体は有明海に面する佐賀市東名貝塚(早期末)からも出土し、縄文時代の海生魚類の地理的分布並びに推移に共通性を示している。コイチは現在の有明海と瀬戸内海に生息する縄文時代海進期からの遺存種と考えられる。ホンニベは高松松平家の衆鱗図(1740年頃)に魚体が描かれ、また1794年頃の岡山藩から徳川幕府へ献上された耳石(大江,2012)にも多数含まれることから、旧児島湾とその周辺には江戸時代後半まで生息していた可能性がある。筆者らはこれまでに、これら3種以外に例えば縄文海進を特徴づける暖海種ウシサワラ *Scomberomorus sinensis* (Lacepède)を鳥浜貝塚(福井県若狭町)、森ノ宮貝塚(大阪市)、天子神社貝塚・本刈谷貝塚(刈谷市)等で確認しており、縄文海進期の日本列島沿岸の魚類相を解明する上で全国各地の収蔵施設に保存されている魚骨の再調査を実施し、従来見逃されてきた古環境を示唆する魚種の再検討が必要と考える。

## C2 宮城県波怒棄館遺跡から出土した動物遺存体

○山崎健（奈良文化財研究所）・松崎哲也（京大）

Animal remains from Hanukidate site in Miyagi Prefecture

Takeshi YAMAZAKI, Tetsuya MATSUZAKI

宮城県気仙沼市の波怒棄館遺跡では、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査によって、保存状態の良い斜面具層（縄文時代前期後半）が3ヶ所見つかった。全国からの派遣職員、宮城県や気仙沼市の皆さんのご尽力によって、発掘調査は予定された期間内で無事に終了したが、マグロ属の椎骨だけで約140kg出土しており、動物遺存体の全体の出土量は数十万点に及ぶと考えられる。十分な整理作業の時間が残されていない中、約2年間で必要最小限の内容を整理・報告しなければならない。「平時の報告書作成方法からさらに簡略化できる部分を検討する」という宮城県の方針に従いながら、整理対象遺物や報告書提示遺物を可能な限り限定して、効率よく作業を進めている。現段階までに明らかとなった分析結果を発表して、広くご意見をいただき、波怒棄館遺跡の発掘調査報告書に反映させたい。

## C3 漆喰の原料となる貝灰

○黒住耐二（千葉県立中央博物館）

Some archeological aspects of lime-plaster made from the shells in Japan

Taiji Kurozumi

貝を焼いて灰を作り、それを建物の漆喰（しっくい）壁等に利用することはよく知られている。貝灰は必ずしも漆喰にだけ利用される訳ではなく、石灰として肥料や、その後の工程を経て胡粉（白粉）ともなっている。今回は、貝灰生産に関連するいくつかの例を紹介し、今後の体系化に向けた基礎としたい。1) 縄文時代後期：千葉市大膳野南貝塚（戸田ら，2014）：後期で多数の漆喰使用住居址や漆喰炉が検出・報告され、貝が原料と認められ、地域の拠点の貝塚に特徴的に認められることが指摘された→その後、継続しない？、2) 古墳時代：奈良県明日香村カヅマヤマ古墳（石井・西光，2007）：玄室内の漆喰中からイワガキ（マガキ属）？が検出された→貝を用いることの意義が存在？、3) 近世～近代：ア．宮城県塩釜市新浜A遺跡（岡村，1996）：カキ利用、イ：東京湾奥部の牡蠣殻採掘坑（川西，2014）：化石マガキ利用（胡粉）、ウ：鹿児島県喜入町「白灰焼窯跡」等（坂元，2005）：化石モクハチアオイ利用、4) 現代：ア．東京湾奥部（聞き取り等）：貝剥き後の殻利用、イ：琵琶湖西岸（岡村，1996）：シジミ利用、ウ．有明海奥部（現地調査）：ハイガイ等。建材の漆喰は普遍的で、重く運搬がやや困難、生産物は特殊化していない等の理由から、各地で小規模な生産も行われていたと考えられる。今後、貝灰生産の詳細や流通、貝灰と石灰岩の利用頻度の研究も必要であろう。

D1 土産品としての木彫り熊の発祥と展開

○大谷茂之(八雲町教育委員会)

Origin and the development of the wooden bear as souvenirs

Shigeyuki OYA

北海道の土産品として有名な木彫り熊であるが、その発祥は 1924 年に八雲町で開催された第一回農村美術工芸品評会に出品された作品に求められる。当時八雲町には尾張徳川家当主が農場主を務める徳川農場が存在し、農場主の徳川義親が、旅行中に訪れたスイスにて木彫りの土産品を見つけて持ち帰り、経済恐慌などで生活が苦しかった八雲の農民の副業として土産品の制作販売を奨励したことから木彫り熊が作られるようになった。1928 年ごろから日本画家の十倉金之が日本画の手法を彫り方に取り入れるとともに、毛を彫らずに面で熊を表現する技法が出現し、擬人化した作品も作られた。戦前には全道だけでなく東京などでも販売され、八雲の木彫り熊が全国的に有名であったが、第二次世界大戦が始まると作者は激減し、戦後はごく一部の作者による制作にとどまり、他地域と技術交流などはあまりなく、独自の技法が発展していく。一方、旭川市近文では、アイヌの松井梅太郎が 1926 年から彫り始めたといわれる。八雲の影響も受けつつ、旭川独自の彫り方が作られていく。戦後の北海道観光ブームの際には、旭川の作者が道内各地の観光地に出向き、土産物屋の店先で実演販売することが多く、技術交流が生まれ、発展する。このころ土産品として人気があったのが「サケをくわえた木彫り熊」で、木彫り熊といえばサケをくわえたポーズが定番となったようである。

D2 鉄製釣針製作用具の新例について

○猪熊樹人(根室市歴史と自然の資料館)

A new example of the bending tool in iron fish hook manufacturing process

Shigeto INOKUMA

現代の釣針製作用具である「針曲げ」は、釣針を湾曲させる際に使用されるものである。木製の柄に U 字形に曲げた鉄線を打ち込んだものであり、民具事例としては北海道から九州まで幅広い地域でその使用が確認されている。宮崎県の民俗例によれば「針曲げ」を用いた釣針製作は次のような手順を踏む。1. 材料になる鋼線を「クワエ」とよばれる木製の器具に固定する。2. 鋼線の先端をヤスリで削り、針先を作り出す。3. 「クワエ」を握った状態で、片方の手に「針曲げ」を持ち、鋼線を曲げていく。4. 針先と反対側の端部を叩くあるいは、削るなどしてテグス止めを作り出す。5. 焼き入れ後水に漬けて冷却して完成。「針曲げ」と同形態をとる金属製品の遺跡出土例は、平戸和蘭商館跡(長崎県平戸市)で 17 世紀前半の事例が知られていたが、由比ガ浜南遺跡(神奈川県鎌倉市)の金属製品を再検討したところ、用途不明として報告されている資料が針曲げと同形態をとっていることが明らかになった。この資料は 13 世紀~15 世紀の包含層から出土していることから、「針曲げ」を用いた釣針製作技法が、従来の知見からさらに遡って行われていた可能性が出てきた。由比ガ浜南遺跡出土の漁具については、過去に再検討を行い、骨角製の軸に鉄製釣針を複数装着したイカ用の擬似針の存在を指摘したこともあるため、これまでの経過を含め当該遺跡での海浜生産についても再評価を行いたい。



### D3 近世近代遺跡出土歯ブラシ形骨加工品―植毛技法に着目した形態分類の提示と時期差の予察―

○藪田みゆき（同志社）

Bone artifacts with shape of toothbrush excavated from the pre-modern and the modern: the study of a shape classification by the hair implant technique and difference by the time

Miyuki YABUTA

近世近代遺跡からの出土事例があるにもかかわらず、1990年代に久保和士氏によって一連の研究がなされるまで着目されなかった骨加工品が存在する。それが「櫛払」である。久保分類における櫛払Ⅳ・Ⅴ類は、植毛を施す台部とそこから連続する柄把部から形成される現用の歯ブラシのような形態を呈しており、近代以降の「骨製歯ブラシ」との明確な弁別基準や技術系譜の問題、詳細な時期・地域差についてはいまだ不明瞭なままである。よって本発表では、櫛払と骨製歯ブラシとを包摂した「歯ブラシ形骨加工品」と呼称する概念を暫定的に設定し、植毛孔・柄部外形・くびれの三種の属性をもちいて分類する。特に植毛孔に着目することで、より客観的な分類基準を提示することを目指す。時期差および地域差を考察するうえでは、歯ブラシ形骨加工品の一定数の出土事例が確認され、かつ近世～近代以降の都市遺跡という共通点を有する京都・大阪・東京の三都を検討対象とした。なお板歯形の櫛払（久保Ⅲ類）も時期差・地域差を考察するうえの参考資料として取り扱う。結果として、歯ブラシ形骨加工品は17世紀中葉から19世紀にいたるまでに徐々に形態が変化することが理解でき、地域差の若干の示唆も得た。本発表は、久保分類を追認する形になりながらも、久保分類Ⅳ・Ⅴ類および斉藤進氏の指摘した近代歯ブラシにおける「溝切り型」の植毛技法のさらなる細分案を提示し、新たな知見を得る結果となった。

### D4 山梨県谷村城における近世の動物資源利用

○植月学（山梨県博）・塩谷風季（山梨県埋文）・網倉邦生（山梨県埋文）

Animal resource exploitation in the Edo period at Yamura Castle site, Yamanashi prefecture

Manabu UETSUKI, Gouu SHIOTANI, Kunio AMIKURA

都留市谷村城は現在の山梨県東部を治めるために築かれた近世城郭とその城下町を含む遺跡である。江戸時代中期には廃城となり、跡地には関東代官が政務を執る谷村陣屋が置かれた。この陣屋が存在した地点で平成26年に山梨県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われた。調査では主に近世の土坑や溝から貝類、魚類、哺乳類遺体などが出土した。最も多く出土した貝類はサザエ、ヤマトシジミ、ハマグリ、アワビ類などの鹹水、汽水産種を主体とし、淡水産のカワニナも含む。貝類に次ぐのが魚類で、マダイ、マグロ属を主に、ヒラメ科、ブリ属、カレイ科などの海産種が中心となり、淡水産種は稀であった。哺乳類はもともと少なかったが、シカ、ノウサギ、ウマなどが見られた。県内ではこれまで甲府盆地南西部に位置する富士川水運の拠点である鰍沢河岸跡や、盆地中央部の甲府城下町遺跡などで近世の動物遺体が調査されているが、本遺跡の動物遺体は山梨県東部（郡内地域）の近世としては初めてのまとまった資料である。貝類や魚類組成は前記2遺跡とも共通する部分があり、県東部においても近世中期には一定量の海産物の流入があったことが確認できた。一方、哺乳類の出土量には遺跡によって差がある。これが地域や遺跡の性格によるものか、時期差を示すものか、発表では遺跡内での時期別傾向や、上記2遺跡とのより詳細な比較により検討を行う。

## E1 レプリカ法による解体痕研究の試み—解体に使用した道具の復元をめざして—

○岩波連(北大)・江田真毅(北大)

Experimental application of the replica method to the cutmark analysis for identification of the animal processing tools

Ren IWANAMI, Masaki EDA

解体痕研究は動物の解体法や動物骨の利用法の解明に有効であるとともに、当時どのような道具が動物の解体に用いられていたかを解明する手がかりとなる。特に遺跡から出土しにくい金属器の使用頻度の解明に繋がれば当時の社会・経済構造を解き明かすうえで重要な要素を提示できる。レプリカ法は考古学では主に土器の種子圧痕の転写・観察などに用いられる方法である。この方法を骨資料に用いることで、骨表面の凹凸などを非破壊で転写し、顕微鏡下で観察することが可能となる。解体痕の研究においても、近年欧米研究者に頻りに利用されている走査電子顕微鏡(SEM)による観察に比べ、容易に多くの資料を観察できる利点があると考えられた。日本動物考古学会第2回大会では、レプリカ法によって解体痕の詳細な観察が可能であること、また解体痕の平面形状は石器と金属器で異なるパターンを示す傾向があることを発表した。今回の発表では、1)実験的に歯こぼれさせた金属器やリタッチを加えた石器など刃部の状況を変えて骨につけた傷痕、および2)確実に石器のみを使用していた縄文時代の骨と金属器を占有的に使用していた擦文時代・近世アイヌ文化期の骨に残された解体痕をレプリカ法で観察した成果について報告する。またこれらの観察に基づき、石器と金属器を併用していたオホーツク文化期の香深井1遺跡において人々が動物を解体する際に使用していた道具の復元をめざした。

## E2 土器胎土脂質分析を利用した海獣利用の評価—真脇遺跡、浜中2遺跡など—

○宮田佳樹(金沢大)・高田秀樹(真脇遺跡縄文館)・堀内晶子(国際基督教大)

Evaluation of marine mammal resources by lipid analysis in pottery

Yoshiki MIYATA, Hideki TAKADA, Akiko HORINOUCI

日本のような酸性土壌の地盤では、遺跡から直接食材推定につながるような動植物遺体が出土することよりも、土器が出土する方が一般的である。土器で調理を行うと、土器内面には調理された食材を起源とするコゲが付着し、土器外面には燃料材を起源とするススが付着する。そして、土器胎土には食材を起源とする有機残渣が吸着する。したがって、土器に残された有機残渣を脂質分析することによって、その起源物質を推定することができれば、土器で調理された食材や調理形態などを詳細に復元できる可能性を秘めている。本研究では、動物性食材、なかでも海獣を積極的に利用した事例を用いて、土器の部位や脂質抽出条件との関係も踏まえ、土器に残存する有機物情報から、動物性食材利用の痕跡を評価してみる。資料提供者の方々と分析に協力して頂いたProf. Richard Evershed (Bristol Univ.)に感謝致します。本研究はH25-28年度科研費基盤B(代表者宮田佳樹; 25282072)の研究成果の一部である。

### E3 藤原宮跡出土動物遺存体の多元素安定同位体分析

○覚張隆史（北里大）・山崎健（奈文研）・降幡順子（奈文研）・石橋茂登（奈文研）・米田穰（東大）

Multiple stable-isotope analysis for mammal remains in Fujiwara palace site

Takashi GAKUHARI, Takeshi YAMAZAKI, Junko FURIHATA, Shigeto ISHIBASHI, Minoru YONEDA

奈良県藤原宮跡では、7世紀後半の宮造営時に利用された資材運搬用の運河跡から動物遺存体が出土しており、ウマが最も多く認められた。飛節内腫の症状が見られるなど、藤原宮の造営には資材運搬などを担う駄馬が多く利用されていたことが明らかとなっている。そこで、本研究では産地情報に関する指標であるストロンチウム(Sr)・酸素同位体比に着目して、藤原宮跡から出土したウマの産地推定を実施し、当時の家畜動物の飼育形態を検証した。その結果、藤原宮跡出土イヌの Sr 同位体比は遺跡周辺域の植物と近似しており、遺跡周辺域外から持込まれた積極的な証拠は示されなかった。一方、藤原宮跡出土ウマの Sr 同位体比は、遺跡周辺域の植物や在地型動物であるニホンジカ、イノシシよりも有意に多様な値を示した。さらに、近畿地方における植物の Sr 同位体比の範囲から明確に逸脱した個体も検出されており、律令制下において馬の生産地と消費地が大きく異なっていた可能性が示唆された。さらに、同一試料の酸素同位体分析の結果、これらの馬が東日本から多く供給されていた可能性が示唆された。

### E4 愛知県における先史時代人骨の身長に関する研究

○村松裕南(名大)

The study about estimate stature of prehistory age population in Aichi prefecture.

Hirona MURAMATSU

縄文人に比べて渡来系弥生人は、形態的に高眼・高顔・高身長である事が明らかにされている。その形質的变化に関して朝鮮半島由来の外来の集団との混血の影響を重視する考え方と生活形態の変化が影響したとする考え方が有り、今日でも縄文時代から弥生時代移行期の列島内での渡来人拡散状況と共に議論されている。東海地域における縄文晩期から弥生時代移行期は、出土土器より在地系縄文人と、以西より流入した渡来系弥生人とが一定の期間それぞれの文化要素を保持しながら共存していたと想定されている。しかし、その集団間の接触実態は明らかではない。

本発表では、愛知県内の渥美半島より出土する縄文晩期人骨と県東部の朝日遺跡より出土した弥生人骨を資料として取り上げ、移行期の愛知県における縄文と弥生の両集団間の交流実態の推定を行う為、形質変化の一要素である古人骨の身長を取り上げその推移の確認と身長推移への混血の影響の有無の可能性を示した。

---

7/4(土) 14:10~15:10 ポスターセッション

---

P1 動物骨資料の損傷と残存 DNA の劣化

○高橋遼平(山梨大)・骨資料の保存検討会

Investigation of relationships between degradation factors and survival DNA in bone specimens

Ryohei TAKAHASHI, Bone specimen preservation workshop

遺跡出土の動物骨を用いた ancient (古代)DNA 解析は、家畜史の解明や現存する家畜の管理・改良、さらには動物資源を利用したヒトの生活史や移動史の検討といった多岐に渡る分野の研究で有用である。しかし遺跡出土の動物骨から抽出した DNA は劣化が著しく、現生資料由来の DNA と比べると一般的に状態が悪い。このため、古代 DNA 解析ではその成功率の低さが問題となっている。この DNA の劣化は出土前の経年変化に加えて出土後の骨資料の保管条件にも影響されると考えられ、水や紫外線、気温などの様々な関連要因が挙げられている。しかし「どの要因で DNA は最も劣化するのか」「保管条件を変えると解析成功率は本当に上がるのか」といった疑問に定量的に答えられる研究は少ない。このような背景から、本検討会では同一個体の骨由来の DNA の劣化の違いを検証する目的で、現生リュウキュウイノシシ (*Sus scrofa riukiuanus*) の下顎骨を複数の骨片に分け、様々な条件で損傷させる実験を開始した。一部の資料については次世代シーケンサーを利用した解析も決まり、予備解析を進めている。本発表では実験体制や研究内容の紹介、予備解析の中間報告に加え、予想される結果を考察する。これらをふまえて、発掘現場や資料保管の場における本研究の活用方法を議論したい。

P2 3D骨格図譜データベースの構築

○菊地大樹(京都大学)・松井章(奈良文化財研究所)

The construction of 3D bone atlas database

Hiroki KIKUCHI, Akira MATSUI

考古学に限らず、近年、さまざまな分野で 3D スキャン技術の応用が進んでいる。われわれもまた、3D スキャン技術の動物考古学への応用を模索してきており、その一環として、2013 年の発表で、これまで二次元的資料に留まっていた骨格図譜を、三次元的資料へ発展させた、「3D 骨格図譜データベース」の構築への展望を述べた。このたび、ヒト、イノシシ、ニホンジカ、イヌ、ウシ、ウマといった、遺跡から出土しやすい種の主要部位の 3D 骨格図譜データベースが完成し、奈良文化財研究所のホームページにて公開をはじめることとなった。本データベースでは、それぞれの種ごとに、各部位の 3D 骨格図譜が pdf 形式でダウンロードできるようになっている。今後は、データベースを更に充実したものにするとともに、分析方法などの解説も順次アップデートしていく予定である。本発表では、本データベースの利用方法を含めた紹介をおこなう。

### P3 後期更新世ノウサギ属の種同定—青森県尻労安部洞窟出土資料の検討—

○澤浦亮平（東北大）・渡辺丈彦（慶大）・平澤悠（慶大）・奈良貴史（新潟医療福祉大）・澤田純明（新潟医療福祉大）・佐藤孝雄（慶大）・鈴木敏彦（東北大）・佐々木啓一（東北大）

Species-Identification of late Pleistocene *Lepus* sp.: with a morphological study of tooth remains from the Shitsukari-Abe cave, Aomori prefecture

Ryohei SAWAURA, Takehiko WATANABE, Yu HIRASAWA, Takashi NARA, Junmei SAWADA, Takao SATO, Toshihiko SUZUKI, and Keiichi SASAKI

最終氷期後期、本州までマンモス動物群の一部が南下したことが知られている。その南下は津軽海峡が障壁となり大型偶蹄類に限定された、という見解が支持されてきたが、小型陸獣については不明な点が多い。こうした状況下、本州北端に位置する尻労安部洞窟から出土した後期更新世の動物化石群は、注目すべき資料となる。当洞窟では、寒冷環境に適応したヒグマ、ヘラジカの歯とともにノウサギ属の歯が多出した。それらが、現在北海道以北に分布するユキウサギ、本州以南に分布するノウサギのいずれに同定しうるのか。津軽海峡の直南という遺跡立地を踏まえたなら、この課題は、生物地理学、考古学双方にとって重要である。そこで、ウサギ目の系統分類に用いられてきた P3 のエナメル質形態で出土標本の種同定を行うべく、現生種とともに  $\mu$ CT スキャニングし、線形計測によるサイズおよびプロポーション、ランドマーク法による形態変異の幅、形態小変異の出現頻度をそれぞれの集団について比較、検討した。その結果、尻労安部洞窟の後期更新世ノウサギ属はノウサギに同定し得ることが明らかとなった。この結果は従来の古生物地理と陸棲哺乳類の移動に関する仮説を支持するものである。

### P4 北海道伊達市若生貝塚の動物遺存体の層位的出土傾向（予察）

○青野友哉・永谷幸人・西本豊弘（伊達市噴火湾文化研究所）

The preliminary study of animal remains from Wakkaoi Shellmound

Tomoya AONO, Yukihito NAGAYA, Toyohiro NISHIMOTO

北海道南西部、噴火湾東岸に位置する若生(わかおい)貝塚は、現海岸線から約1km 内陸の標高約50mの高地に立地し、湧水点を中心に5つの貝塚(A～E地点)が分布している。このうちA地点貝塚では、1952年に峰山巖らによって4×4mの範囲の発掘調査が行なわれており、保存状態が良好な貝層厚3mを超える縄文前期の貝塚が確認されている。発表者らは、2014年度より「北海道噴火湾沿岸の縄文文化の基礎的研究」(JSPS 科研費 26284125)の一環として、1952年調査区の再発掘調査を行なっている。2014年度調査では、現存する厚さ約2.2mの貝層をⅡ～Ⅴ層に分層したうち、下位にあたるⅣ・Ⅴ層出土の動物遺存体について種同定・MNI算出・サイズ計測等の分析をおこなった。その結果把握された層位的出土傾向は以下の通りである。Ⅳ・Ⅴ層ともにマガキ・アサリ・ウニが主体の純貝層である。マガキ・アサリの出土量が多いことやマガキの平均殻高が8cm(3年貝相当)前後であることから、安定した資源量が推測される。なお、1952年調査では下層から多量のハマグリが出土したとされるが、今回の調査では数点しか確認されていない。魚類はカレイ類・カサゴ類が多く、Ⅴ層を中心に暖流系のタイ・スズキ・アジなども出土した。哺乳類は黒(褐)色土層中に多く見られ、Ⅳ層ではエゾシカが、Ⅴ層ではオットセイが比較的多い。以上のことから、調査区における貝層は、縄文海進期の最温暖期を過ぎて寒冷化へ向かう時期に形成されはじめたと考えられる。

## P5 縄文時代前半期の東北地方におけるマグロ漁とその利用

○松崎哲也（京大）・山崎健（奈文研）

Tuna fishing and use in the first half of Jomon period in Tohoku region

Tetsuya MATSUZAKI, Takeshi YAMAZAKI

縄文時代の東北地方太平洋沿岸地域では、遺跡から大型のマグロ属が多量に出土することが知られている。マグロ属の捕獲には銚の使用が想定されることが多いが、東北地方においていわゆる燕形銚頭が出現するのは後期になってからである。一方で、前期から中期の遺跡から特にマグロ属が多く出土しており、大部分がマグロ属の骨で占められている層も報告されている。捕獲方法については釣漁や追い込み漁が推測されているものの、具体的な根拠が示されていないのが現状である。現在、東北地方では復興事業に伴う発掘調査が進められており、前期から中期に比定される遺跡から非常に多くのマグロ属の骨が出土した。出土したマグロ属の多くは椎骨であるが、その中には解体痕と思われる傷跡のほか、刺突を受けたような痕跡が残されていた。また、石器が刺さった状態で出土したものが数点見つかった。銚頭が出現する以前の遺跡であり、マグロ属の捕獲方法を検討する上で重要な資料である。本発表では、これらの骨の分析から縄文時代前半期のマグロ属を対象とした漁撈活動の一端を明らかにすることを目的とする。

## P6 現生イノシシを用いた臼歯形状のランドマーク解析（予報）

○山田英佑（総研大）・本郷一美（総研大）

Landmarks analysis of molar shape using extant Japanese suids: preliminary report

Eisuke YAMADA, Hitomi HONGO

幾何学的形態測定学は、形態情報をサイズ要因と形状要因に分離して解析できる手法として、考古学を含む多くの分野で利用され始めている。本研究は、その一種であるランドマーク解析法を用いて、今日の日本列島に生息するイノシシの臼歯の形状差を検出して、亜種や生息地域が異なる個体群の判別が可能であるかを検討した。まず、各個体の臼歯を咬合面から撮影し、輪郭線上に等間隔で座標点を設定した。次に座標点を回転、移動、拡大縮小することでサイズ要因を除去した後、正準判別分析により集団間の形状差を検討した。その結果、第4乳臼歯の形状から、本州および九州と、琉球列島の各地域集団が判別できた。また、琉球列島の地域集団が比較的明瞭に判別されたのに対し、本州や九州の集団差は不明瞭だった。本研究において、環境要因の影響を受けやすいサイズではなく、臼歯の形状から琉球列島のイノシシ集団が本州および九州と区別されたことは、両者の系統関係を考察する上で特に意義深い。この点に関する更なる議論のため、台湾や中国本土、東南アジアなど、近隣の地域集団からのデータを収集し比較する必要がある。また、現生の在来品種家畜ブタのデータを充実化させると共に、考古遺跡出土のイノシシと初期の家畜ブタ臼歯の形状解析を行うことで、地域個体群や系統の解析、野生個体と家畜個体の識別など、イノシシ類の家畜化や伝播経路に対する理解が大いに進展すると期待される。

## P7 千葉県須和田遺跡出土の古代犬骨にみられる病理痕について

○山崎京美（いわき短大）、金子浩昌（東博）

A preliminary analysis of palaeopathological traces in a dog skeleton of the ancient time from Suwada site, Chiba prefecture

Kyomi YAMAZAKI, Hiromasa KANEKO

千葉県市川市に所在する須和田遺跡第6地点では、「井戸状遺構」と称される3号土坑から8世紀後半世紀頃に比定される多量の須恵器、土師器などとともに、イヌ 11 個体、ウシ 3 個体、ウマ 2 個体が4枚の貝層の間から検出された。出土状況から、ウシやウマは別の場所で解体された一部が、イヌは全身の遺体が短期間に同一土坑に遺棄されたと推定された。また、11 個体のイヌは一つの家族集団に帰属する可能性や、閉鎖的な集団内での飼育に起因すると推測される骨格の異常も報告された。このように、本遺跡は当時の人間の動物利用を考える上で興味深い資料を提供する。今回は古病理学的アプローチから動物利用を探る予備調査として、骨格異常がもっとも顕著な 1 号犬を対象に、口腔、体部や四肢骨に残る病変の観察と画像診断を行った結果を報告する。

## P8 日本中世のイヌについて—由比ガ浜南遺跡出土資料を中心に—

○渡邊綾美（名古屋大）

Medieval dog of Japan : excavated from Yuigahama-Minami site and others

Ayami WATANABE

イヌは、人類史において早くから家畜化された動物の 1 つである。その用途については、狩猟犬として人間の狩猟活動を手伝ったものや、人間の食料になったもの、また交易の際に献上されたものなど様々あったといわれている。日本では、縄文時代や弥生時代、江戸時代の遺跡からイヌが多く出土し研究がすすんできたが、それらの時代と比較すると中世のイヌの出土量は少なく、その実態は不明な部分も多い。神奈川県鎌倉市の由比ガ浜南遺跡では 1995 年から 1997 年にかけて発掘調査がおこなわれ、中世のイヌが出土している。しかし、一部の報告が 2001 年にされたものの、一部は未整理のままであった。今回発表者は、この由比ガ浜南遺跡出土の未整理の中世のイヌ資料を手にする機会を得ることができ、主に頭蓋骨の形態の観察と、その計測をおこない推定体高を復元した。本発表ではこれに加えて、現在までに報告されている他の遺跡から出土した中世のイヌのデータを合わせ、それらの特徴について考えてみたい。

P9 モンゴル国における先史時代の副葬されたウマについて—パジリク時代のウマを中心に—  
○バトツェンゲル ツォグゾルマー（名古屋大）

Excavated prehistoric horses of the Pazyryk kurgan in Mongolia

Battsengel Tsogzolmaa

動物と深い関係を持つ遊牧民の国であるモンゴルでは、遺跡からウマが多く出土する。ウマ遺体の出土状態には大きく2つのパターンがある。一つは人の埋葬に伴う副葬であり、もう一つはウマ儀礼(犠牲)に使用されたものである。ウマ儀礼は青銅器時代のみに見られ、「ヘレクスル」や「鹿石」と呼ばれる遺構で検出される。ヘレクスルは積石塚を方形あるいは円形の石列で囲った遺構であり、主に積石塚の東側に石堆が複数置かれ、さらにその外側には全体を囲む形でストーンサークルが配置されることもある。この石堆からウマ遺体が出土することが多い。鹿石は多くの場合、鹿の紋様がきざまれた立石で、その周辺には直径2～3メートルの石堆が配置され、そこからウマ遺体が出土する。本研究では、モンゴルの青銅器時代遺跡に見られるこれらのウマ儀礼について検討し、その結果を文献史料やウマに関する習慣と比較してみたい。

P10 鯨髭・骨の有効利用についての—考察—耳かき製作の事例を中心に—

○内田昌宏（富士市立富士第一小）

Effective utilization of baleen and normal bones of whales: with a special reference to the earpick making

Masahiro UCHIDA

先人たちが、古くから鯨を有効利用してきた一端を示すものとして、論者は本学会第1、2回大会において、現代に受け継がれてきた鯨歯・髭の工芸細工について紹介してきた。今回の発表では、鯨髭・骨の有効利用例として、身近な生活用品でもある耳かきの製作について着目する。耳かきは、適度な柔軟性と耐久性が求められる。鯨髭は、かつては薬さじの原料としても用いられてきたが、鯨髭の耳かきもそれと同様に、熱処理しながら成形された。また、鯨骨製の耳かきの場合は、硬い骨を切断・加工・研磨などの工程を経て製作された。同じ耳かきという用品を製作するのにあたり、髭鯨と歯鯨という種類とその部位の性質の違いから加工方法が異なることを明らかにしたい。



---

## 「動物考古学」33号 原稿募集に関するお知らせ

---

「動物考古学」への投稿をお願いいたします

「動物考古学」に掲載する原稿を募集します。締め切りは特に設けておりませんが、33号（2016年3月刊行予定）に掲載するためには10月頃までの投稿をお奨めします（査読結果によっては掲載が間に合わない場合もございます）。学会誌の充実のため、積極的な投稿をお願いいたします。

### 原稿の種類

- 論文：未発表の新しい資料・知見をまとめたもので結論の明確なもの、または特定の主題について研究史・これまでの研究成果・展望などを総覧したもの
- 研究ノート：論文に準ずるもので、研究の中間報告や速報性を要するもの
- 調査報告：考古学、民俗・民族学、生物学などの調査の成果報告
- 資料紹介：重要資料の紹介
- 雑録：書評、関連学会の報告や紹介、国際情勢の動向など

また、今年度も「出土動物遺体速報」に掲載するデータを募集します。対象は平成26～27年度に刊行された報告です。

詳細については学会公式ホームページの投稿規定、執筆要領をご確認ください。

<http://www.flet.keio.ac.jp/~sato/Zooarch/top.html>

「動物考古学」編集委員会

植月 学（委員長）、江田真毅、小野林太郎、小島秀彰、建石 徹、津村宏臣、丸山真史

<投稿先>

〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田 1501-1

山梨県立博物館 植月 学

E-mail：js.zooarch.ed@gmail.com

---

日本動物考古学会第3回大会  
プログラム・抄録集

---

発行：2015年7月4日

発行元：日本動物考古学会第3回大会事務局  
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45  
慶應義塾大学 文学部 佐藤孝雄研究室

印刷：ACCEA 田町店  
〒108-8345 東京都港区三田 3-1-11 エック三田ビル 1F

---

